
お伽噺

綜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

お伽噺

【Nコード】

N5418J

【作者名】

綜

【あらすじ】

昔々ある王国に、それはそれは暇でたまらない王様がいました。そんな王国に訪れた不運な旅人の語る物語。

その物語は、自分のことをシンデレラと名乗る奇妙な美少女、自称シンデレラ、中々な役者の継母、妙に冷めてるシスコン（当然の事ですが自称シンデレラではなく妹に対して）な義兄、将来有望な悪役の義妹、そしてほとんど登場しない父のすこし現代風味で無理矢理なこじ付けシンデレラストーリーのようなシンデレラになる物語

お伽噺の始まりは

昔々ある王国に、それはそれは暇でたまらない王様がいました。

その王様のいる王国は、ありえないくらい平和でした。

周りの国は王様の王国とは比べ物にならない位の小さな国で、その気になれば3日もあれば潰せるほどの弱小国でした。

王様の王国にいる民も、王様に反逆しようという意思を抱くような民はおらず、むしろ更に良い国にする為に毎日ある程度仕事を頑張っている程度の民しかおりませんでした。

そういうわけで、今日も王様は暇で一日をただ無駄に消費していくのでした。

ある日の事でした。

王様の元に一人の旅人が訪れました。

王様は尋ねます。

「お前は何者だ？」

旅人は、にこやかに答えます。

「王様が暇そうなので、物語でもして王様の退屈な心を一時でも楽しませてみたいと思い、この国を訪れたただの旅人です」

「そうか。だが、そんな辺鄙な理由を持つただの旅人は見た事が無

い。怪しいな……。よし、この国の脅威になり得るかもしれんから処刑して見世物にでもするか」

王様の突拍子な発想に旅人は仰天して懇願しました。

「ちょっと待って下さいよ、王様！絶対に面白い話ですから、聞くだけ聞いてみてくださいよ！せめて処刑はそれからしてください！」

王様は面倒くさそうな顔をしたが、旅人が煩いから渋々承諾した。そして、旅人の物語は始まりました。

自称シンデレラ001

そう遠くない昔、シンデレラと名乗る娘がおりました。

これは、そんな娘の話です。

娘は、窓の外を見つめていました。

「ああ、なんて可哀想な私！いつも容姿の醜い継母や、その連れ子の不細工な義姉に虐められているだなんて。誰でもいいから早く舞踏会とか催してくれないのかしら？」

自称シンデレラは肝の据わった図太い神経の娘でした。

そんな自称シンデレラに声をかける人物がおりました。

「花子、いつまで寝ぼけてるつもりだい？さつさと着替えて、家の事くらい手伝いな！」

継母です。継母の登場です。多分この人が継母です。

というか、自称シンデレラの名前で出ませんか？

自称シンデレラは花子という名前だそうです。

日本人のような名前ですね。

「だって、寝巻きのネグリジェが一番ドレスみたいじゃない！」

継母は自称シンデレラの説明を瞬時に無視し、家事に勤しみます。継母も慣れていきますね。

というか、童話の中のシンデレラはネグリジエ着れる様な良い身分だったんでしょか・・・？

そんなことは一切気にせず、自称シンデレラは渋々学校指定のジャージに着替えます。

ネグリジエと一介の学校指定のジャージとの差はかなり大きいです。

「ああ、これもお父様の為よ！しっかりしなさい、私！こんなことで挫けてちゃ王子様に後宮に入れられた時、他の女に殺られるわよ！」

後宮ですか。

シンデレラって正妻即決定じゃないんですか。

殺られるって、どんだけ危ない後宮に行こうとしてるんですか。

そんな独り言を言っている危ない自称シンデレラを嘲る声がします。

「おい、花子。いい加減その変なシンデレラごっこ、やめたらどうだ？」

義姉・・・義姉の代わりに義兄が登場です。

継母の連れ子の義姉の代わりに義兄が出てきました。

役は義姉のようです。

義兄は、自称シンデレラのやっтерることを、シンデレラごっここと称してます。

義兄の脳内では、継父の連れ子の一人でシンデレラごっこをしてい

る危険な義妹という設定になってるようです。
そんなことを説明していると、義兄の後ろから小さな女の子が小さな顔を見せます。

「花子お義姉ちゃん・・・シンデレラは末っ子じゃないの？じゃあ、ちーちゃんのお義妹になるの？」

おっと、これは！

花子には継母の連れ子の義姉の義妹ではなく、継母の連れ子の義兄の義妹がいました。

義兄が、「千晴、アレはシンデレラごっこをしているだけだから、少しくらい都合良くしても良いんだよ。だから、千晴はアレに構わなくていいからね」などと諭しています。

義兄は要するに、可愛い妹の千晴を継父の連れ子の一人でシンデレラごっこをしている危険な義妹の花子・・・いや、自称シンデレラのやっているシンデレラごっこに巻き込ませたくないんですね。

義妹は千晴という名前だそうです。

花子とは大きな違いですね。

「あ、花子。今日は俺たち夕飯食いに行くけど、お前家の中で怠けすぎだから留守番だって母さんが言ってたから」

それを聞いた自称シンデレラの目が煌々と輝きます。

「これは・・・！城で開かれる舞踏会を義姉たちが自慢してくるシ

「ーンねー！」

自称シンデレラの解説を軽く流して義兄と義妹が遠ざかっていきま
す。

自称シンデレラ、継母の家族全員に呆れられています。

呆れられているというよりは、無視されています。

ここまでくると、自称シンデレラが少し可哀想で情けが湧いてきま
すね。

しかし、自称シンデレラはそんなことを意に介さず、なにやら怪し
いことを言い始めました。

ス欲しいドレス無いドレス欲しいドレス無いドレス欲しいドレス無
いドレス欲しいドレス無いドレス欲しいドレス無いドレス欲しいド
レス無いドレス欲しいドレス無いドレス欲しいドレス無いドレス欲
しいドレス無いドレス欲しいドレス無いドレス欲しいドレス無いド
レス欲しいドレス無いドレス欲しいドレス無いドレス欲しいドレス
無いドレス欲しいドレス無いドレス欲しいドレス無いドレス欲しい
ドレス無いドレス欲しいドレス無いドレス欲しいドレス無いドレス
欲しいドレス無いドレス欲しいドレスが無いのドレスが欲しいわあ
っ！」

微妙に語尾が変わってますが、迫力は変わりません。
もう一度大事な事じゃないですけど言っておきます。

これ字数稼ぎ違いますよ。自称シンデレラの発言ですよ。

自称シンデレラの言いたい事は、簡単にまとめると「舞踏会に行き
たいけど、ドレスが無いからドレスが欲しい」ってわけですね。

『でも、王子様って王様の子供なわけだし、招待状とかいるんじや
ないの?』とか、『王子様にそんなに簡単に会うことが出来て良い
の?』とか、『王子様暗殺されちゃう心配とかないの?』とか、『
ボディガードが超無敵とかご都合主義なこと言うなよ?』とか、『
王子様だから超無敵も駄目だよ?』とか、そんなことは言っちゃい
けません。

子供の夢は何でもありなのです。ノープロブレム!

「あら、あれは何かしら?」

おっと、どうやら自称シンデレラが何か見つけたようですね。
何なのでしょううか?

自称シンデレラ003

あ、あれはタクシーです！

どこにでもある様な何の変哲も無いタクシーです！

自称シンデレラは何でそんなタクシーを見たのでしょうか？

「くそっ……！間に合うか……」

自称シンデレラの言葉づかいが何故か遅くなりました。

何があったと言うのでしょうか？

いや、何があると言うのでしょうか？

そして、その自称シンデレラは、わずか5分で身支度を整え、玄関まで全力疾走です。

途中の階段でちょっと滑りかけたけど、そんなことは顔には出さず、玄関に向かっちゃいました。

玄関で履きなれたちよっと泥のついているミュールに足を突っ込んで、家から飛び出ます。

「待って下さい！」

なんと！自称シンデレラの声色が、まるで儂げな美少女のような声に豹変しました！

そして、さっきのタクシーの中には補助席に継母、後部座席に父が、義兄が。

タクシーに乗ることを自称シンデレラは予知したんですね。

所謂エスパーってやつです。

そして最後に止めを刺すかのように義妹、千晴が義兄の膝の上に座って満面の笑みを浮かべてこっちを見ています。

義妹は将来有望な悪役になれるでしょう。

「何かしら？」

若奥様風に継母が目を細めて自称シンデレラを静かに見ます。

自称シンデレラは、継母の雰囲気に一瞬気圧されましたが、すぐに言い返します。

「私も、連れて行ってくれませんか？」

捨てられた子犬のように目を潤ませ、切なげに継母に頼みます。

タクシーの運転手のおっちゃんも流石に気まづくなつたのか、そわそわしちゃってます。

これで「ただ単にトイレに行きたかっただけです、えへっ！」とか言っただ日にはおっちゃんの明日は無いですね。

さて、自称シンデレラたちの話に戻りましょうか。

継母も中々の役者のようです。

少し思案するような素振りを見せて、残念そうに自称シンデレラを見遣ります。

「花子、課題はもう終わったのかしら？」

課題・・・はて、何のことやら？

あ、あれか。

継母の第一声「花子、いつまで寝ぼけてるつもりだい？さっさと着替えて、家のことくらい少しは手伝いな！」ですか。

家のことは全部し終わったのか？ってことですよね、きつと。

無理矢理な解釈だって？気のせいですよ。

自称シンデレラもそのことだと適当に決め付けて、躊躇い無く答えます。

「ええ。終わりました」

嘔吐きですね、自称シンデレラは。

家事は何一つやってなかった。

「それに・・・」

自称シンデレラは続けて言います。

「お義兄様は、お夕食に参るだけと仰っていましたのに。私を騙したのですか？」

まるで自称シンデレラが騙されたかのような言い分ですね。実際騙されてましたけど。

継母が義兄を見ます。

「どついうことですか、悟」

義兄の名前は悟のようです。

義兄は、申し訳無さそうに継母に頭を下げます。

「すみません。僕の説明が稚拙なものだったので、うまく伝わらなかったようです。ですから、僕の代わりに花子を一緒に連れて行ってくださいませか？」

義兄が良い奴に見えます。

義兄がタクシーから降りようというような素振りを見せました。

その時、膝の上にいた義妹の千晴が義兄の服の裾を掴みます。

「悟お兄ちゃん、一緒に遊園地に行ってくれるって約束は？ちーちゃん良い子にしてたけど、駄目だった？ちーちゃんやっぱり悪い子だった？」

この一家、今から遊園地に行く予定だったみたいですね。

一言も言われてなかったですね。

義妹の目から大粒の涙が、ポツリ、ポツリと義妹の小さな手と義兄の服の裾の上に義妹の顔を伝って零れ落ちます。

それを見た、タクシーのおっちゃんは慌てて目を逸らします。

継母は、小さく溜息を吐きます。

「悟、今回は千晴に免じて許して上げましょう。そして、花子」

自称シンデレラの名前を呼ぶと、継母は申し訳無さそうに言いました。

「ごめんなさい、先方には4人と既に伝えてしまっているの。今更変更などしては迷惑が掛かってしまいます。次の機会に一緒にしましょうね。」

そうして、継母はタクシーの運転手のおっさんに小さく合図すると、そのままどこかへ行ってしまいました。

自称シンデレラ004

「あの家族・・・！」

自称シンデレラは何かを知っているようですね。
自分の推理を探偵の如く語ります。

「継母は私に来ることを予期していなかった。だからありもしない課題が終わったのか？などと聞いてきた。そして、私がそれ聞いて戸惑うと思ったようだけど残念だったわね。私が迷わず答えることで、疑い難くなったのよ。更に、継母に私を騙したのかと問うことで、お父様の不信感が煽れるわ。・・・失敗したけど。まあ、それはさて置き！ここからがあの一家の技よ！」

もはや推理を語るというよりは、継母たちの発想に驚き賞賛しているようにも見えますが。

「義姉を疑い、家族平等の精神を示したのね、私の代わりに義姉に留守番をさせようとする振りをしたのよ。そこで、もう一人の義姉が庇うの。約束を守ることの大事さを訴えかけた。それに心を打たれたのかのように、継母が私にまるで悪いことをしたかのように謝る。くそっ！見事な連携プレイだったわ。あんな短時間に、あれほど巧みな作り話を作れるなんて！そして、この私を振り返りにする

なんて！私としたことが、一生の不覚だわ！待ってなさいよ、必ず舞踏会に行つてやるわ！」

やっと自称シンデレラの解説が終わりましたね。

長かったですね。

危うく眠つてしまつところだった。

始めの義姉が兄の悟で、もう一人の義姉が妹の千晴ですね。

自称シンデレラ未だに勘違いしています。

そして、遊園地です。

舞踏会も違います。

「こんなことをしている場合じゃないわ！早く追わないと！」

玄関で呆然としていた自称シンデレラは我に帰ると、何処かへ走つていきます。

なりふり構つてません。

正直見苦しい勢いで、何処かへ行つてしまいました。

「着いたわ・・・」

誰に言うわけでもなく、自称シンデレラは呟きました。

そこは、ごく普通のありきたりな交番でした。

自称シンデレラは、威勢良く交番に入ります。

一体何をするつもりなんでしょうか？

「すみません！」

自称シンデレラは、突然交番にいる初老の警察官に向かって声をかけました。

初老の警察官がどうしたのかと聞いてきます。

「あの、私・・・迷子になってしまったんです。家族と一緒に遊園地に向かったはずなんですけど、家族と逸れてしまって・・・」

「お嬢さんの家はこの近くかい？」

初老の警察官は、自称シンデレラを家まで送り届けるつもりのようにです。

自称シンデレラは、困ったように言います。

「いえ、家から3、4時間かけてここまで来たもので・・・」

「じゃあ、家の電話番号とか、家族の電話番号はわからないかな？」

初老の警察官は根気強く自称シンデレラに訊ねます。

「家の番号はわかりますけど、家には誰もいません。家族の携帯の電話番号までは、覚えてなくて、すみません」

自称シンデレラが、泣き始めます。迫真の演技です。

初老の警察官は戸惑いを隠せずオロオロとしています。

そんな初老の警察官を見て、自称シンデレラは思わず笑みが出てきてますが、動揺している初老の警察官は気付きません。

「あの、もういいです。これ以上ご迷惑はお掛けできませんし、とりあえず自分で遊園地まで行ってみます。有り難う御座いました」

初老の警察官は、慌てて自称シンデレラを呼び止めました。

「お嬢さんこの近くの人じゃないんだろう？ だったら遊園地まで連れて行ってあげるよ」

初老の警察官は、若い警察官を呼ぶと、簡単に説明してから仕事に引き返しました。

若い警察官が、車に連れて行きます。

自称シンデレラがガッツポーズを取っているのは、気のせいでしょうか。

「お譲ちゃんが行くのは、この近くの遊園地で間違いないんだね？」

「はい。」「迷惑お掛けして、申し訳ありません」

それから、若い警察官と、自称シンデレラはそれなりに会話をして、遊園地まで連れて行ってもらいました。

交通費が要らなくなるならこれくらいのは芝居は易い物のようです。狡猾い自称シンデレラですね。

自称シンデレラ005

遊園地に着くなり、自称シンデレラはとても迷子とは思えない程あっさりとして若い警察官に別れを告げ遊園地に入ります。

若い警察官は暫く呆然と立ち尽くしていました。

「魔法使いや南瓜の馬車は手に入らなかったけど、警官とパトカーのおかげで何とか無事に舞踏会に間に合ったわ。あの家族が家に帰るまでには帰らないといけないけど、まずは王子探しね！待ってなさい、私の王子様！」

何と言うことでしょう。

自称シンデレラは、魔法使いの代わりに初老の警察官を、ハツカネズミの代わりに若い警察官を、南瓜の馬車の代わりにパトカーを利用したのです。

いつの間にか考えたのでしょうか。

謎ですね。

この自称シンデレラには謎が多いです。

「それにしても・・・駄目ね、この舞踏会。誰も私の美しさに見蕩れないもの。これは舞踏会じゃないのかしら？」

利己的な自称シンデレラです。

それにここは舞踏会じゃないですし、遊園地だって何度も言ってます。

自称シンデレラも交番で確かに遊園地って発言してたくせに都合よ過ぎですね。

自称シンデレラは、不意にステージらしき場所に目を向けました。人が集まっています。

「一体誰がこんなに人を集めてるのよ……」

悪態を吐きつつもステージを見ると、自称シンデレラが愕然としました。

「だ、誰よ、あいつ！私より美しいだなんて……これは、まさか！運命の白馬に乗った王子様！」

自称シンデレラの王子像には追加オプションとして、運命と白馬が付いてるようですな。

この辺の勘違いは許されるのでしょうか？

「でも、どつやって近づこうかしら？本来なら王子から近づいてくるはずだけど……」

一向に自称シンデレラの元に来る気配がしません。それどころか眼中にも入ってないようです。

「駄目か・・・作戦を練り直すしかないわね」

自称シンデレラが落ち込んで、ベンチに座って作戦を練っていると声をかけられました。

不機嫌な自称シンデレラは振り返って相手を睨みつけます。

「今忙しいのよ、邪魔しないで！・・・あ」

そこには先程まで人目を集めていた自称シンデレラの運命の白馬に乗った王子様です。

さすがの自称シンデレラも絶句しています。

突然の出来事で言葉が出ません。

金魚みたいに口をパクパクしちゃってます。

自称シンデレラの脳内では、後悔と期待が闘ぎ合っています。

「う、う、う、ごめんなさあーいいいい！！！！」

逃げました。

自称シンデレラ、脱兎の如く逃げ出してしまいました。

自称シンデレラが立ち上がった瞬間なにやら耳障りな物が折れるような音がしましたが、自称シンデレラはそんな事に形振り構っていませんね。

呆然とする自称シンデレラの運命の白馬に乗った王子様と泥がこびり付いているミュールの踵だけがその場に取り残されていました。

「ついに、やってしまったわ・・・ミユールを置いていけばよかったのに、いや、この際履き捨てても良いからやって置けばよかったのに・・・私の馬鹿。慌てて立ち上がったものだから踵の部分が遠慮なく折れちゃったじゃない！恥曝しもいい所よ！どんだけ私は重いよ！・・・まあ、今更何か言っても変わらないし、仕方ないか」

落ち込みながら自称シンデレラは家路に着きました。

翌日。

自称シンデレラの家には折れた泥のこびり付いたミユールの踵を持ったゴツイおっさんが現れていました。

自称シンデレラは、玄関にいるゴツイおっさんから隠れるように見えていました。

「どうしよう。あれ、私のだわ。もしかして、折り逃げしたことを怒ってるのかしら？不法投棄したのが見つかって罰金？少年院？刑務所？裁判とかはめんどくさそうだなあ」

着眼点がずれている以前に論点のずれている自称シンデレラは、暫くしてまともな考えに至りません。

「もしかして、昨日の王子は実は超偉い人で、私凄く無礼なことしたんじゃない・・・」

八つ当たりして逃げたことですね。
ただ声をかけたただけなのに、運が悪かったんですね。

自称シンデレラ006

「花子お義姉ちゃん、向こうにいるおじちゃんと呼んでるよ」

将来有望な悪女の義妹、千晴がゴツイおっさんを指差します。

自称シンデレラの顔色が真っ青になっていきます。

「これがきっかけで内戦が起こったら・・・」

被害妄想が激しいですね。

どうやって内戦を起こすんでしょうか。

しかし、必死に靴箱を漁ってる継母の姿は滑稽です。

見苦しいものです。

自称シンデレラも、その姿を見た途端咄嗟に目を逸らしました。

「ど、ど、ど、どうしよう！あの継母まさか私を売るつもり?!それ、この家にもうあの片割れがあることが判明してるの?!」

自称シンデレラ動転しすぎです。

そばで自称シンデレラの百面相を眺めていた義妹が助言してあげます。

「花子お義姉ちゃん・・・いつまでも隠せるわけじゃないんだから、

早くしたら?」

自称シンデレラは戸惑います。

所詮こいつも継母の手先だという思いと、確かに早く見つかった軽い罪の方が良いなあという思いに悩まされています。

自称シンデレラは、自室のゴミ箱から折れたミユールを拾い上げ、玄関へ向かいます。

「はい。あなたの探してるのは、これでしょ?もう何処にでも連れて行きやがれ!」

自称シンデレラが自暴自棄に言い放つと、ゴツイおっさんは目を見開きます。

ゴツイおっさんはそれがきつちり合うか確認すると、一度だけ頷きました。

「宜しいのですね?それでは早速・・・」

そう言ってゴツイおっさん自称シンデレラを連れ出し、いかにも金持ちそうな真っ黒な車に乗せます。

自称シンデレラも腹を決めて本来の悪人面に戻ります。

これこそが自称シンデレラの本性ですね。

実に似合っています。

「ああ、私のシンデレラストーリーもここまでか、無念・・・」

自称シンデレラの呟きが聞こえたのか、ゴツイおっさんが運転しながら答えます。

「シンデレラストーリー、ですか？それはきっと正しく貴方の様な事を言うのですね」

ゴツイおっさんの発言に自称シンデレラは困惑します。

ゴツイおっさんが初めて自称シンデレラのシンデレラごっこに付き合ってくれたからでしょうか？

「何言ってるの？あんたは私をこれから処刑場に連れて行くつもりで言うんでしょ？」

自称シンデレラの攻撃的な物言いに、ゴツイおっさんが肩を震わせつつ笑っています。

ゴツイおっさんは外見と行動があつてませんね。

今の自称シンデレラとは大違いです。

「処刑場というよりは、お家自慢の大好きな紳士と自分が一番美しいと勘違いする淑女の舞踏会に、ですね」

自称シンデレラの思考がストップしました。
待ちに待った舞踏会への入り口によく辿り着いたのですから。
今回ばかりは自称シンデレラの勘違いじゃないです。
ゴツイおっさんは言い募ります。

「中々ご主人様のお眼鏡に適う様な伴侶が見つからなくて、困っていた所だったんですよ」

何か微妙に愚痴られてる気がしますが、自称シンデレラは一応聞くつもりです。

「昨日はご主人様自らが探しに行くと言って聞かなくて、止むを得ず外出したら偶々見た目も麗しく、一つひとつの仕草さえ優美な肝の据わった図太い神経を持つ娘がいると、泥のこびり付いている折れたミュールの踵を持って嬉々として語り、私たちに探すように命令したのです」

自称シンデレラはその時のことを思い出したのか、真っ青になります。

過去の事をいつまでも引き摺るなんて面倒な人ですね。

「訊けば、とある交番の警察官からは、遊園地まで迷子の美少女を送ったとか、送った途端悠然と遊園地に入っていく後姿はまるでただの迷子ではなくわざと軽傷を負って救急車をタクシー代わりに使う手練の様だったと熱く語られ、とあるタクシー会社の運転手から

は、玄関先で昼ドラみたいな家族愛のドラマを10分前後見て、その後がまるで何事も無かったかのように楽しそうに会話の弾む家族がまるで悪魔の集団に見えたとか恐怖に慄いていたと、ぼそぼそと語られましたよ。そんな感じで、あなたの家族にいる誰かと判明したわけです。」

そうですね。

普通あんな目立つ事をすれば、誰だってすぐにわかりますって。

あ、自称シンデレラが俯いたまま肩を震わせてます。

まさか家族が無情すぎて泣いているのでしょうか？

「残念だったな、継母よ。私は見事に真のシンデレラと成り得たのよ。待つてなさい、これから嫌という程愚弄してやるわ！シンデレラとして！」

自称シンデレラが車内で高らかと宣言します。

その姿はまるでこれから戦いに出向く一人の孤高な戦士のようにです。

ゴツイおっさんなんか微妙に引いてますよ。

今更気付いたんでしょうか、この自称シンデレラの奇異さに。

でもその勢いは止まりません。

何たって彼女はシンデレラなのですから。

お伽噺の終わりは

「・・・めでたし、めでたし」

王様は、難しそうな顔をしていました。

それに気付いた旅人は、ぼんやりと処刑の事を考え始めていました。

「おい、それでこの話は終わりなのか？」

「ええ、そうですねよ」

全てを吹っ切ったように・・・というよりはもう半ば自棄気味に言っています。

「なんか・・・めでたく終わったのか？何だかバッドエンドに聞こえたが・・・」

「気のせいですよ。この娘は最終的にはシンデレラになれたんですから」

「うむ・・・確かに。その後花子はどうなったんだ？」

「王子様と一緒に世界制服でもしたんじゃないんですか？あ、その前に継母一家を倒さなきゃいけないのか」

「その先は無いのか？」

「当たり前ですよ。この後何を続けるんですか。この話はシンデレラになる話なんですから、シンデレラになったらそこで終わりなんですよ」

「そ、そうか。ところで、話の途中に出てきた日本やら遊園地やら交番やらタクシーやら会社とは何だ？話に大きな支障は無かったが、よく分からなかったぞ」

「それは、先の未来になれば自然と分かることになりますよ。それよりも処刑されるんでしょうか？」

「処刑はまだせんよ。まだお前から沢山の物語を聞いてみたいと思っただ。処刑はそれからだ」

旅人が語れる物語はこの一作だけだったが、王様に次の物語を語るように頼まれる度に旅人は物語を適当に想像し、王様に物語をした。

ある王国に、物語を聞くのが好きな非常に物知りな王様がいました。その王様のいる王国は、ありえないくらい平和で、ありえないくらい先進技術を司る国でした。

周りの国は王様の王国とは比べ物にならない位の小さな国で、その気になれば一両日中に潰せるほどの弱小国でした。

王様の王国にいる民も、王様に反逆しようという意思を抱くような民はおらず、むしろ博識な王様の指示仰ぎ更に良い国にする為に毎日ある程度仕事を頑張っている程度の民しかおりませんでした。

そういうわけで、今日も王様は物語を聞いて一日を消費していくのでした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5418j/>

お伽噺

2010年10月9日05時44分発行